秋田県衛生研究所報

第　1　輯

昭　和　2 9　年　度

REPORT

Of the

Akita Institute of Public Health

(1)

NO 1

MARCH

1955

秋田県衛生研究所

秋田市土手長町1

1 Dotenaga-machi Akitacity

Akita-Pref Japan

推　奨　の　こ　と　ば

秋田県知事　池　田　徳　治

いつの世、いかなる時代にも衛生状態は、その国の文化の指標であつて、民族の文化と共にその歩みを続けているといわれる。

本県の衛生状態も著しく改善され、防疫及び環境衛生の進展と共に、悪疫はそのあとを断ち、結核の死亡率は半減し、食生活の改善、簡易水道の普及等により、県民の平均寿命は、六十才を越すまでに至つている。

これは中央病院並びに、地方病院等のいわゆる公的医療機関の整備を中心として医療関係従事者の異常な努力に負うところは勿論であるが、一面保健所を始めとする県の保健衛生施設の充実整備に負うところも決して見逃がしてはならないと思う。

中でも、明治十三年以来、たび重なる組織の改変にあいながら、七十四年の間、県民の保健生活に直結しつつ、その基盤を培うために誠に地味な細菌検査や化学検査の仕事に血のにじむような苦闘を続けられた衛生研究所の存在は、高く評価されなければならないところである。

殊に最近衛生研究所の整備拡充が県民の間に強くとりあげられているが、黄変米、放射能障害、公害問題などの環境衛生面の解決、二十八年南秋田郡天王町周辺に発生した食中毒患者の病源物質を追求した結果、ボツリヌス菌を発見したこと及び最近はこれらの毒素の貝殻培養に成功したなど学界はあげてその成果に注目している。

幸い専任所長には斯界に造詣の深い児玉博士を迎え、衛生研究所本来の使命達成に着々実績をあげておられることは県の衛生行政進展の上に大きな期待がもたれると共に、整備拡充の第一歩を踏みだしたものと言えよう。

このたび衛生研究所が、明治以降の文献と各種の資料を始め、事業実績をとりまとめて、ここに年報として発刊する運びに至つたことは、誠に時宜を得たものというべく、ひいては、わが秋田県の文化の歩みを記録するものとして衛生関係者は勿論、ひろく一般の活用をおすすめする次第である。

発刊によせて

秋田県衛生部長　佐藤太郎

わが国の衛生行政における試験検査機関としては、国に国立予防衛生研究所、国立衛生試験所、国立栄養研究所、都道府県には地方衛生研究所があつて、これらが各々衛生行政に必要な試験検査を行うこととなつている。

本県の衛生研究所は、昭和二十三年四月衛生三局長の通牒によつて設置を望まれたことに端を発し、従来の細菌検査室及び衛生試験室を根幹として同二十八年一月設置されたもので、単に細菌検査、衛生試験等の実施にとどまらず、地方の実情に即する調査研究機関としての性格が要望されている。

即ち、衛生行政の科学的進展の基盤となるべき正確な試験検査並びに診断を期するため、衛生検査指針審議会の制定にかかわる標準術式六十項目によつて実施されている件数のみでも年間、18,364件に及んでいる。

又県下十三保健所を直接の窓口とする検査又は研究材料は、管内の環境衛生対策、患者の診断及び治療に対し、科学の進歩に即応した援助を与える媒体として、その範囲は益々拡大され、ひろく全県下に亘つている。

従つて衛生研究所の仕事は、単に衛研そのものの業務に関するのみではなく、ひろく保健所業務に関する関係施設の整備並びに衛生技術者の教育訓練を通じ、技術の徹底向上にも大きな役割を期待されて来ていることは言うまでもないところである。

このたび衛研が、明治初期の単に防疫上の立場から始めた細菌血清学的諸検査、寄生虫卵の検査及び化学試験としての飲料水検査を実施したいわゆる揺籃時代より今日に至るまでの貴重な文献及び資料を蒐集されて年報とし、これを発刊する運びに至つたことはまことに喜びに堪えない。

幸い本書が公衆衛生関係者は勿論、広く関心をもたれる各位に十二分に活用され、本県衛生行政の進展に大きな足掛りとなることを念願してやまない次第である。

発刊を祝して

公衆衛生課長　齋藤精一郎

私事に亘ることが多くて恐縮ですが、公衆衛生の仕事をさせて頂いてから前後二十三年にもなり、今更乍ら文字通り感無量なものがあります。

公衆衛生の仕事も警察部、内政部、衛生部と其の主管部がかわり、取締を主体としたものから指導に重点が指向されたのも世の中のうつり変りを如実に物語つているようです。

さて現在では専ら充分説得の上で、納得して頂いて民衆のよりよい協力を得て、公衆衛生活動の推進を図つている訳ですが、この仕事は何処迄も技術を基盤として居りますので科学的に処理されるのが当然です。然し単に文字の上で科学と言つても仲々納得して頂けるものでなく、ここに衛生研究所の果す偉大なる役割があると考えます。

昔から少さな建物の中に細菌検査室と化学試験室とがあつて主力をあげて依頼検査をコッコッやつたのですが……人員、設備等の関係もありますことは勿論です……県独自の観点から調査研究を加味した仕事は出来なかつたので、佐藤衛生部長の英断によつて昭和28年1月24日衛生研究所が誕生し、当分の間私に所長事務取扱の役が与えられ、何等為すところもなかつたのでしたが、幸にも昨年6月25日に学識経験共に豊富な現所長児玉先生を迎え、県民の御期待に添い得たのであります。

何うぞ130万県民の公衆衛生活動が、円滑に促進されますよう今後より一層の御指導御協力をたまわらん事をお願し、所員御一同の健康と健斗を祈りつつ発刊をお欣びしたいと存じます。

年報発刊にあたつて

薬務課長　福田九八

このたび県衛生研究所において、昨年中実施した諸検査並に調査研究の結果を集録し、年報として刊行する運びに到つたことは従前から深く関係していたものとして、寔に適切な企てと衷心より喜びに堪えない次第で、集録された諸調査、報告等は何れも衛生行政の上に重要なる基礎資料となり、指針ともなり大方の貴重なる参考となることと確心して疑はないところである。

なおこの調査、報告は現在実施中のもの或は今後相当長期に亘つて研究せられる事項もあるかと思はれるが、その成果も必ずや大なるものと期待している。

衛生研究所は昭和28年従来の細菌検査室及び化学試験室を改組して研究所と改称発足したものであるが、建物、内容設備等は名に伴わず旧態依然のままで至極不十分であるが、所長はじめ所員の之を克服した熱心な研究心によつて著しく業績を挙げて居られることは誠に心強く、又その御苦労を多とするものであつて更に今後一層の御努力を切望するものである。

更に我々も出来得る限り今後共協力いたしたいことを附け加え簡単乍ら発刊の挨拶とする次第である。

発刊にあたつて

秋田県衛生研究所長　兒玉栄一郎

最近の衛生統計を観て驚くことは何と言つても結核死亡の減少ということである。この結核死亡の減少ということは、吾人が無為拱手して導かれた結果ではなく、その基底には各方面に亘る倦まざる努力があつたことを忘れてはならない。こゝに観みて遺憾なことには、日本に於て結核の死亡は減少したとはいえ、その発生数が著減しないことであるが、しかしやがて近い将来には結核の発生は勿論、死亡も激減して行き、結核に対して吾人が現在懐いている杞憂も失せて行くこと、思うが、この願望が実現された場合、社会全般に及ぼす恩恵の広大さを考えるとき、吾人の胸中には歓喜が泉の如く湧き上るであろう。

以上のことは数多い疾病の中の唯一つの結核という疾病を捉えての話であるが、若しもその他のあらゆる面について科学の力が滲透して行き、なおまた家畜や植物などに至るまで高度の文化が浸潤して行くものと仮定するならば、無病息災の天国建設も万更夢物語ではないと思われる。

しかし今日、吾人がどうでも生きて行かねばならぬ現実の世に思いを格すと、無病息災の天国という観念とは霄壌もただならぬ差があることに気付く。然かも小さくなつた日本国土は戦前から有たざる国の一つであり、戦後は更に条件が悪い。学者は生活に喘ぎ、子弟の教育に事を欠き、況して研究費の乏しさは警言を要しない。吾人の生活を豊かにし、快適であつて無病の楽土を建設したい念願は誰人の胸中にもあること、思うが、しかし万能の神は自ら努力を払わぬ人を助ける筈はない。そうかと言つて研究に対する熱意は燃えに燃えても吾人の辿るべき道は阻まれ勝ちであるのが今日の世の姿である。

吾人はこゝに自然科学のみが吾人の生活を豊かにするものであるとは言いたくない。しかし遠いヒポクラテス時代はいざ知らず、近代、殊にルネッサンス以後に於ける科学の発達とその恩恵を想起したい。第一次と第二次世界大戦は惨禍をこの世に齎したとはいえ、科学の急激な発展を促したことは疑わない。然うかと言つて科学の発展には世界大戦を必要であるという意味ではないことを強調したい。私は大戦を契機とした科学者の総身の努力と国家の惜しみない厖大な費用とを思うのである。すなわち自然科学を蔑視する所には世の中に発展はなく、ひいては文化もないことは異論のないこと、信ずるし、また世界文化史の示すところでもある。

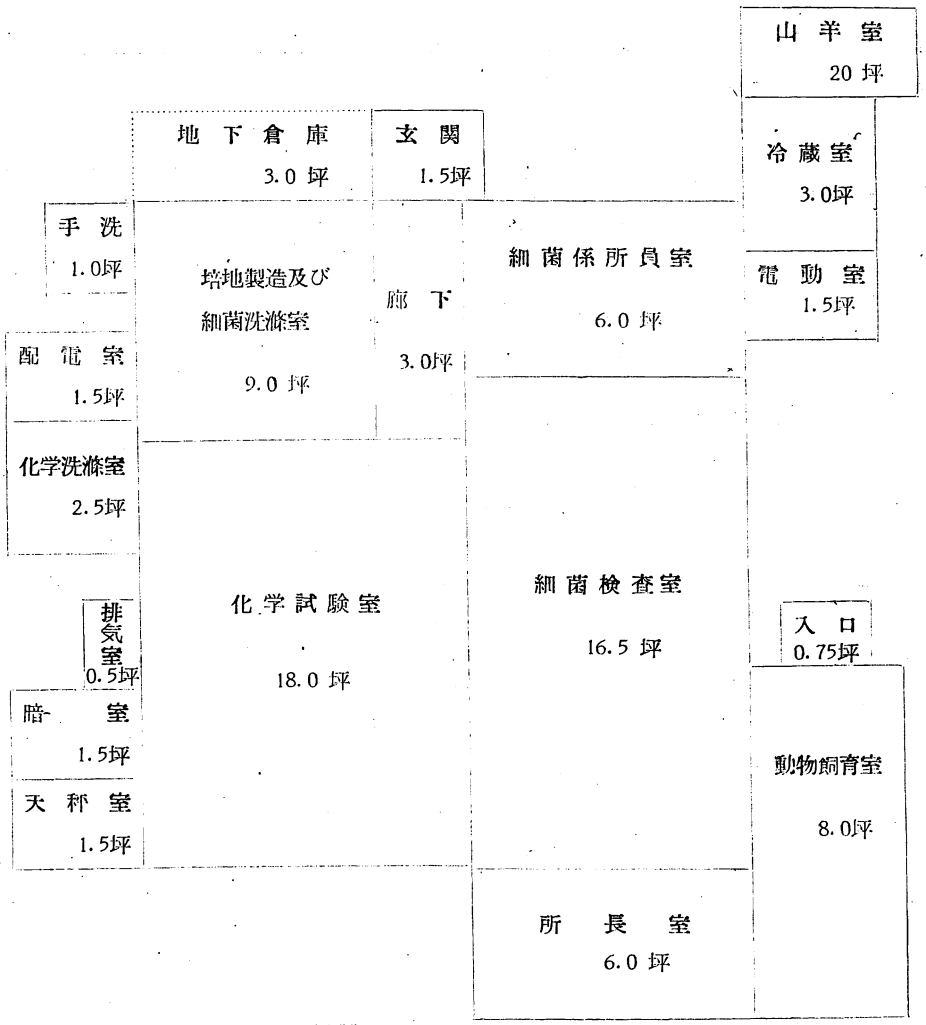
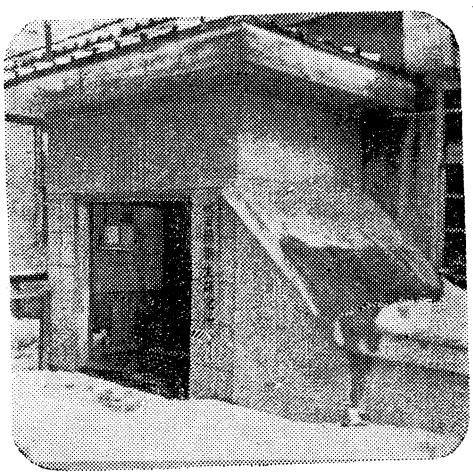
しかし科学の発達には人類に対する不祥事がまつわることが無いとしない。例せば第一次世界大戦事の毒瓦斯であり又第二次世界大戦の原子爆弾である。毒瓦斯(戦陣瓦斯)のうち黄十字の符号をもつたレウイサイトは「死の露」と呼ばれ、ビキニの原子雲は「死の灰」を降らしたことは吾人の脳裏に深く刻まれている。しかし

また毒ガスのうちでもクロールピクリンは貯藏米を蟲から守り、マスタードガスは癌治療藥の基材となつたが、原子爆彈はやゝ方向を変えることによつてアイソトープとなり、ラジユームやX線の代りとなり、また原子力となり、またなりつゝある。アラビヤンナイトの空飛ぶ毛氈は現在立派な大型の飛行機となつていることを考えると、日本産の米粒が2倍大きくなり、年産1億2千万石となれば、主食についての食糧問題が一挙に解決されるかも知れない。

さて現在日本に於て復興の目覚しくないことはない。戰時中の暗黒時代から、そして敗戰後の虚脱状態から漸く脱し、勤勉たる気力を取り戻していることは寔は注目するに値する。とは言え、吾人の周囲にはなをものの正常の姿と思われないものが少くはない。しかし吾人は苦難の多い途中に於ても同胞の福祉と愛護のため渾身の努力を惜まぬのみか、やがては燦くであろう栄光を遙かに仰ぎつゝ前進したいと念う。

昨年私が僭越にも「衛生秋田」誌に私としての抱負を述べさせて戴いたが、今日でもその念願は変らず、今後は現在当研究所にある細菌部門、化学部門に更に病理部門を加え、業務の関係上更に細分強化し、許さるゝならば完全なものに成して行きたいと思うことには変りなく、また現在とても事情の許される限りその方向に押し進めている積りである。

勿論科学は独占せられるものではなく、自然科学は人文科学を含めてあらゆる部門が有機的に連繫せられるべきであると思うし、かくしてこそ其処に無駄がなく、迂遠が除かれるばかりでなく、反つて進歩と発達が生じ、ひいては人類の幸福が結果すると信ずるが故に私は先ず年間或は季間毎の業務と業績とを観み、これを基礎として進行方向を確める意味で、貧弱のそしりを免れないと思うが茲に衛生研究所の昭和29年度の年報を発刊し、今後は年間に2乃至4回に亘る季報を発行して行きたいと思う次第で、全国各衛生研究所を初め各機関の御支援を切にお願いするのである。

幸いにもこの年報を発刊するにあたり、池田秋田県知事を初め、佐藤衛生部長からは激励の御言葉を戴いたばかりでなく、前衛生研究所長であつた斎藤公衆衛生課長からもお喜びの辭を頂戴し、また福田薬務課長からも祝福の御言葉を賜うしたことは寧ろ所員の誇りとするところであり、所員と共に満腔の感謝を捧げる次第である。

秋田県衛生研究所庁舎見取図